

二〇二一年度

中世文学会秋季大会

講演・研究発表要旨

古典文学における〈継子いじめ譚〉の展開と漢土の文学―比較から見えてきた流れ―

梅花女子大学 三木 雅博

中世の文学において、〈継子いじめ〉はそれほど珍しい題材ではなく、特にお伽草子や説経など一般民衆に愛好された分野においては、〈継子いじめ〉を扱った作品の名をいくつも挙げる事ができる。これらの〈継子いじめ〉を扱った作品については、「昔話や伝説などによく見られる伝統的な〈継子いじめ〉の話を聞いた」と解説されることが多いが、はたして〈継子いじめ〉は日本にもともと存在していた話型なのであるか。

管見では、古代前期（上代）の文学作品（記紀・風土記・日本霊異記等）には、継母が継子を虐待する明確な〈継子いじめ譚〉を見出し得ていない。古代後期（平安時代）の10世紀後半によくやく『うつほ物語』の「忠こそ」や『落窪物語』『住吉物語』が登場するのだが、これには古代の貴族社会でその頃までに起こっていた、親子関係や家の継承をめぐる家族制度・社会制度のあり方の大きな変化が関係していると思われる。

一方、漢土においては、秦・漢以前から多くの〈継子いじめ譚〉が既に広く行われており、それに加えて漢代以降には仏典に由来する〈継子いじめ譚〉も流入している。これらの〈継子いじめ譚〉は早く奈良時代から日本に伝わり、平安時代以降の古典文学に〈継子いじめ譚〉が根付いていくうえで、大きな役割を果たしていると考えられる。

今回の講演では、

- ・ 男子が主人公の〈継子いじめ譚〉を対象に、
- ・ まず、漢土で行われ日本にも伝来した〈継子いじめ譚〉について検討し、
- ・ 漢土の〈継子いじめ譚〉と平安期から中世にかけての日本古典文学に現れた〈継子いじめ譚〉―具体的には『うつほ物語』『忠こそ』、『今昔物語』『陸奥国府官大夫介子語』、能「弱法師」・説経『しんとく丸』、説経『あゝいごの若』など―との関係について考え、
- ・ 日本古典文学における男子を主人公とした〈継子いじめ譚〉の流れについて考えてみたい。

『今昔物語集』はどう読まれたか―総六丸から福永武彦まで―

奈良女子大学名誉教授 千本 英史

『今昔物語集』は日本中世を代表する説話集として広く知られている。中学校の国語教科書の定番教材でもあり、絵本などでも多く素材として扱われもする。およそ日本という国で公教育を受けた人で、『今昔物語集』という名を聞いたこともないという人はそう多くはないだろう。

しかし同時に、少しでも中世の日本文化を学んだ人であれば、この集が江戸時代までほとんど巷間に知られることがなく、またそもそも「説話文学」というジャンル規定自体が存在しなかったということもよく承知されていることだろう。

『今昔物語集』がどのように姿を現し、どのように受け入れられてきたのかについては、近代初期の萌芽的な研究以来、これまでから多くの報告が重ねられてきた。比較的近年でも、「鈴鹿本」の影印公開さらに国宝指定、芥川以前の中学校教科書への採録の事実の指摘、また最近急速に注目を集めつつある南方熊楠の『今昔物語集』への言及などなど、多くの知見が紹介されている。今回は、『今昔物語集』の活字テキストとして画期的だった岩波書店の日本古典文学大系（旧大系）本が出現する一九六〇年という時点（第一巻一九五九年、第五巻一九六三年刊行）までを、ひとつの区切りとして、あらためてそれらの事跡・経緯を整理紹介しつつ、『今昔物語集』が「どのように読まれてきたか」という視点を重視して、検証してみたい。そのことは、ともすれば今日前提的に語られてしまいがちな「説話」「文学」という枠組みを再検討することにも繋がるのではないかと考える。今回はまた、そうした検討の内でも「現代語訳の問題」および「児童文学への取り込み」についても、視野を拡げて考えてみたい。

謡曲《放生川》の制作背景と祝言の方法

東京大学大学院博士課程 杉山 翔哉

謡曲《放生川》は石清水八幡宮における放生会を舞台とした作品である。前半では老翁らによって八幡神の神徳と放生会の謂われなどが説かれ、後半で老翁は「武内の神」（武内宿禰）として正体を現して舞を舞い、舞楽の曲名を挙げて歌道の隆盛を言祝ぐことで当代を祝福する曲である。作者は世阿弥とされる。

冒頭には「御影を仰ぐこの君」という具体的な表現が見られ、「神と君とに仕への臣」としての武内宿禰が出現させるほか、末部にみられる歌道の讃嘆など必ずしも放生会の場に直結しない要素も認められる。《放生川》は石清水社放生会の賛美に留まらないものをもつのではないか。

先行研究は当曲成立の背景として足利義満・義持の放生会上卿勤仕に顕著に認められる室町将軍の八幡神崇敬を指摘する。また、祝言曲であるにも関わらず「方便の殺生」の語が用いられることなどから減罪や鎮魂のイメージを読み取る見解もある。本発表ではこれらの指摘をふまえ、応永の外寇直後の応永二六年（一四一九）に義持が上卿として勤仕した放生会を制作の直接の背景として考える。まず『看聞日記』等により、将軍自身も外寇に対する神の感応に接し、上卿勤仕に異国調伏の要素もあつたとする既存の指摘に加え、制圧の事実が都に伝えられたのは放生会の直前であり、放生会の前後は公武にわたる祝賀ムードにあつたことを確認する。また、《放生川》では放生会起源伝承を「異国退治」へと変化させるが、これも応永の外寇が契機だと推定できる。

当曲末部は舞楽の曲名と和歌とを織り込んだ詞章によって四季を循環させることで祝言性を醸成し、その過程で宮中の情景を作品へ引き込んでいる。これも同年の放生会勤仕と同時に企画された舞御覧や前年の舞御覧をふまえたかと推定する。つまり、当曲は応永の外寇前後における義持周辺の状況を色濃く反映したものととして、放生会の場を超える、より広範で一貫した祝言性をもつと考えられるのである。

世阿弥の父子物狂能

国文学研究資料館プロジェクト研究員 鶴澤 瑞希

本発表は、世阿弥が手掛けた物狂能のうち、父と子を中心とする家族の姿を主題にした作品群、特に〈土車〉という作品に注目し、世阿弥の能作の一側面について考察するものである。

世阿弥が制作・改作に関わった物狂能を主題別に分けると、母子の別離・父子の別離・男女の別離の三種に大別される。本発表で着目するのは、そのうちの父と子の別離を主題にした一群である。この種の作品には、攫われた子を父が探す〈逢坂物狂〉、失踪した父を子が探す〈土車〉〈多度津左衛門〉、子を失った父が物狂になる〈丹後物狂〉などがある。これらの能は母子の物狂能とは異なり、必ずしも失われた子に対する親の強い愛が主題になっているわけではない。なかには親と別れた子の悲哀や、頼る者をなくしたか弱い幼子の絶望に焦点を当てた作品もある。

なかでも〈土車〉は、父親が我が子を棄てるという、愛情の薄い父子を題材にした作品である。この能で描かれているのは、単純な別離の悲しみではない。恩愛の情を絶つためわが子を棄てる父親の肉体的な弱さや、棄てられたことで生きるすべを失った幼い子の状況の悲惨さなど、登場人物の細やかな描写を読み取ることができる。世阿弥は、子の失踪と親の狂乱という従来の親子物狂能の構想を少しだけ複雑にすることで、家族の内面に厚みを持たせる工夫をしているのである。

世阿弥はこのほかにも、〈柏崎〉のなかで親子の心のすれ違い描く工夫をしている（拙稿「世阿弥自筆本〈柏崎〉にみる父と子の絆」『鍍仙』六八四号）。世阿弥は家族の描写に工夫を加えることで、物狂能に家庭劇としての面白さや新しさを追求していたと考えられる。これは、世阿弥以前の古作の能には見られない新しい特徴だが、このような読み方は先行研究ではされてこなかった。

本発表では、〈土車〉を中心に父子物狂能をこのように読み直すことで、世阿弥が試行錯誤した新しい物狂能の形を明らかにする。

『徒然草』の読書論―「灯のもと」の美意識―

国文学研究資料館特任助教 黄 昱

「ひとり、灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とする」から始まる第十三段は『徒然草』の中でも名文であり、後世の『徒然草』受容において注目し値するものである。例えば、近世期において伝記の少ない兼好法師の肖像画のほとんどは灯のもとで読書する姿で描かれており、俳諧や浮世草子などの作品にも読書する兼好法師像が定着していた。

しかし、これだけ注目された灯のもとで読書する場面であるが、先行する日本の和文脈の古典作品に灯のもとと読書する行為を関連付けて描写する例は多くない。ただ、和歌には、「ともし火」と「友」と一緒に詠み込んで、長き夜の寂寞たる情緒を描く例などが見られる。

漢詩文の用例を分析すると、中国唐代の詩に灯のもとで読書する行為を詠んだものは僅かであるが、第十三段と同じ『莊子』を詠み込んだものが見られ、特に『白氏文集』の漢詩が多いことが注目される。さらに、日本の漢詩には灯のもとで読む書物として老荘が少なからず詠まれたところが興味深い。例えば、『本朝無題詩』巻五藤原季綱の「秋夜閑談」や藤原明衡の「初冬書懷」には夜に披読する書物として老荘を挙げている。『徒然草』第十三段に『文選』『白氏文集』と並べて老荘を漢籍の代表として取り上げた理由は、兼好の老荘への傾倒も一因であるが、これら漢詩の影響も考えられよう。

本発表はこのように中国と日本の漢詩における「灯下読書」の詠み方を辿りながら、物語と違った和文脈の古典作品に見られる「灯のもと」の用例より、『徒然草』第十三段は中国と日本の漢詩に詠まれた「灯下読書」の場面から影響を受けた可能性を考察する。

第十二段で「まめやかかの心の友」の得難さを嘆いた兼好は第十三段に、灯のもとで老荘を読む行為を多く取り上げた中国と日本の漢詩を踏まえて、古人を「心の友」と憧れ、一種のポーズとしてこの「灯のもとに文をひろげ」る風雅な場面を描いたのではないかと考える。

『源平盛衰記』の終結部について

大阪工業大学非常勤講師 井上 翠

『平家物語』諸本の終結部については、六代の処刑が描かれて全十二巻を閉じる屋代本などの断絶平家型、その末尾に建礼門院に関する記事を灌頂巻として置く覚一本などの灌頂巻型、源頼朝を称えて結ぶ延慶本などの型に分けられる。断絶平家型以外の諸本においても、平家嫡流最後の人物である六代の処刑は描かれている。一方、『源平盛衰記』では、最終巻である巻第四十八が灌頂巻に相当する内容となっているが、六代の処刑に関する記事が見られない点において他本とは大きく異なっている。また、頼朝の死や文覚の配流が描かれなだけでなく、平氏の残党や源氏の内紛に関する記事なども簡略である。これに関連して、「灌頂巻」に相当する箇所を除き、盛衰記は一応の叙述を文治元年をもって終えている」ことが榊原千鶴氏によって指摘されている（榊原千鶴「『源平盛衰記』の頼朝」『日本文学』第四十二巻第六号、一九九三・六↓『平家物語 創造と享受』三弥井書店、一九九八・十）が、厳密に言えば巻第四十七の末尾は助命された六代と母が再会する文治二年正月である。そしてこれは『源平盛衰記』が巻第四十八を灌頂巻に相当する内容として結ぶことと関連すると考えられる。

巻第四十八は建礼門院の出家、大原入り、大原御幸、死去から成るが、出家、大原入りは巻第四十四から巻第四十六においても描かれ、重複している。巻第四十八においてはじめて描かれ、主眼となるのは大原御幸以降であり、後白河院が大原御幸を思い立つのは文治二年二月上旬、大原御幸が行われるのは文治二年卯月の末の三日である。すなわち、『源平盛衰記』の終結部は建礼門院の物語という終着点へとつながっていると考えられる。

さらに、巻第四十七が髑髏尼説話と六代説話のみで構成されている点、巻第四十八において延慶本とはやや異なる形で承久の乱に言及される点などもふまえて、『源平盛衰記』の終結部がどのように描かれているかを考察する。

『愚管抄』本文再考―島原本の性格と意義―

総合研究大学院大学博士後期課程 児島 啓祐

一般によく利用される日本古典文学大系『愚管抄』（岩波書店、一九六七年刊行。以下、大系）の底本は、肥前島原松平文庫所蔵の七巻八冊本である（以下、島原本）。島原本が江戸前期を遡らない比較的新しい写本でありながら大系の底本として採用されたのは、本文に文明本（書陵部所蔵、文明八年の奥書を有する本）や文明本の脱文を数多く補うことができる阿波本（鎌倉末期、南北朝期の本奥書を有する本）と近似しつつも所々違う部分が見受けられ、文明本よりも古態を残しているのではないかと推測されたためである（赤松俊秀氏の大系解説「V諸本」）。

ただし赤松氏自身や、近年では坂口太郎氏も説いているように、島原本には問題点が散見される。たとえば、「底本が今一つ明確にならない」（大系の解説、三一頁）点や、注の本文化や漢字表記の増加等、本文に後出性が認められる点である（坂口氏「『愚管抄』校訂私考」（『古代文化』第六八巻第二号 二〇一六年九月））。

本発表では以上の問題点と向き合い、島原本の位置づけの再検討を試みる。島原本の底本の考証を通じて、その性格及び意義を明らかにしたい。

結論を示せば、島原本は写本の形態的特徴によって、巻一・三〜七からなる六冊（以下、甲本）と、巻一・二の二冊（以下、乙本）の取り合わせ本であることが判明した。本文系統に関しては、甲本が阿波本系と文明本系の二系統を底本としており、一方の乙本は改変の跡の顕著な阿波本系に基づいている。つまり島原本は、二種の形態と三種の本文からなる伝本なのである。

島原本の伝来史的意義は、貸し借りによって揃えなくてはならなかった「希世之書」（『国史館日録』寛文七年八月十八日条）『愚管抄』の江戸前期の書写事情がうかがえる点に存する。さらに、林鶯峰旧蔵の本との密接な関係（甲本の底本の一つ）が見出せることで、鶯峰と松平忠房（甲本の所持者）との交流が浮かび上がる点も、この本の重要な価値である。

配所における後鳥羽院詠―題詠を視座として―

鶴見大学 田口 暢之

後鳥羽院の隠岐における詠作は、『遠島百首』・「詠五百首和歌」・『後鳥羽院御自詠合』・『遠島歌合』など、ほとんどが題詠歌である。しかし、その中には配流に対する憂愁や激情が読み取れる作も多く、早くから「実情実感の歌」として注目を集めた。そこから後鳥羽院の心境やその変化を読み取る作業が進められてきた。

それに対し、寺島恒世氏は隠岐の後鳥羽院が一般的な題詠歌も少なからず詠んでいる点に注目し、「実情実感の系譜」と「題詠歌の系譜」の「二面性」を指摘する。これは重要な視点である。たしかに、題詠歌は「虚構の世界を詠んだ歌」が原則のほずであり、それを読解する際も、まずは作者の実人生から切り離すのが通例であろう。「実情実感の歌」も題詠の形式をとる以上、それは同様のほずである。それでは「実情実感の歌」とされる詠を題詠歌として読んだ時、どこまで解釈できるであろうか。

本発表では、こうした問題意識のもと、「実情実感の歌」をあえて虚構の作として読解する。その結果、ほとんどの「実情実感の歌」が現実の状況を踏まえなくても、述懐性の強い題詠歌として無理なく解釈できるところを指摘する。つまり、「実情実感の歌」と「題詠歌」が別々に存在するのではなく、同じ一首の歌が「実情実感歌」の側面と「題詠歌」の側面を併せ持つ、言わば「二重性」が想定できるのである。

ところが、『遠島百首』にはその例外が目立つ。「後鳥羽院が配所で詠んだ」という事実を想起しなければ解しにくい作、すなわち題詠歌としては破綻しかねない作が散見するのである。これは隠岐の諸作品の中で特殊なケースと言ってよい。そして、そうした作が特定の系統の伝本に偏る点は特に注意されよう。このように、「実情実感の歌」の題詠歌としての側面は、隠岐の後鳥羽院の和歌活動全体を考察するうえでも重要な意味をもつと言える。